

第5回高木レクチャー — IHES50周年を記念して

小林俊行

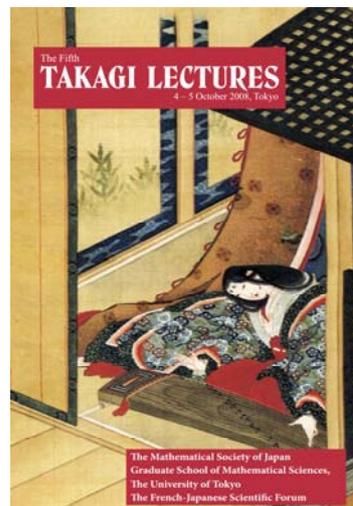
2008年10月4日(土)・5日(日)に、東京大学数理科学研究科棟の大講義室において第5回「高木レクチャー」が行われました。参加者は200人を超える大盛況となりました。

2008年は、江戸時代末期に日仏修好通商条約が結ばれてから150周年の節目の年で、さらにフランスにおける数学研究所の最高峰であるIHESの設立50周年にあたります。そこで第5回の高木レクチャーはIHESの教授陣をお迎えして行うことになりました。今回の高木レクチャーは日仏科学フォーラムと東大数理GCOEにもご協力をいただき、日本数学会と東京大学大学院数理科学研究科とが共催しました。

第5回の高木レクチャーの講演者は、IHES所長のブルギニョン教授と、同研究所紀要Publ. IHESの編集長であるジス教授、IHES所員であるフィールズメダリストのコンツェビッチ教授と、ヘルマン・ワイル賞を受賞しているまだ30代のネクラソフ教授の4名です。



第5回高木レクチャー：左からブルギニョン、ジス、高木貞治（銅像）、コンツェビッチ、ネクラソフ

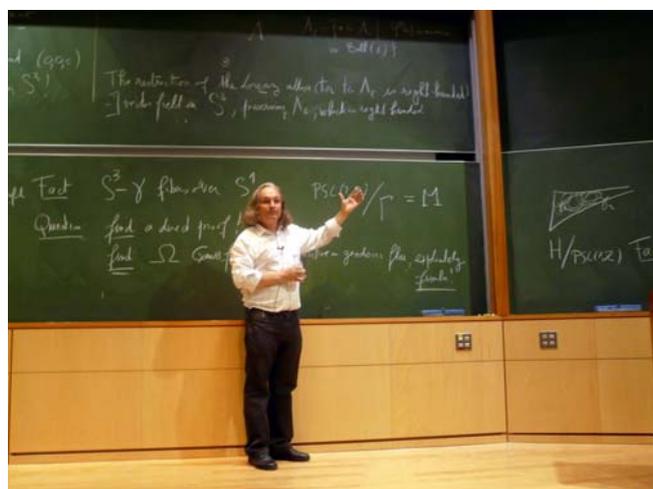


高木レクチャーのブックレット

ブルギニョン教授は「リッチ曲率と測度」、ジス教授は「右手型ベクトル場とローレンツ・アトラクター」、コンツェビッチ教授は「ホロノミックD加群と正標数」、ネクラソフ教授は「インスタントン分配関数とM理論」をテーマとして、それぞれ2時間にわたる講演が前編・後編の2回にわたって行われました。



ブルギニョン教授



ジス教授

講演当日の受付では、各講演者から予め集めたレジュメを印刷して綴じた約 100 ページのブックレットが配布されました。



ワイン・パーティ

週末にもかかわらず 200 名を越える聴衆が集まった大講義室では、講演中も休憩時間も終始議論が交わされ、講演者・参加者の方々の情熱と、「良いもの」を共有しようという思い、そして「高木レクチャー」の目指す「新しい数学の発展」を求める熱気が感じられました。初日のブルギニョン教授の講演のあとには、同じ会場で（慶應大学の前田吉昭教授が主催された）フィールズ・メダリストの広中平祐氏とコンツェビッチ教授による高校生を対象にした対談が行われ、会場は一層賑わいました。全講演が終了した日曜日の夕方には、2階のコモン・ルームでワイン・パーティが開かれ、講演者も参加者も和気藹々と歓談を楽しみました。



熱気につつまれたコンツェビッチ教授の講演



ネクラソフ教授

この高木レクチャーの準備と当日の運営にあたっては、組織委員の斎藤毅教授、河東泰之教授、私に加えて、桂利行研究科長、宮岡洋一副研究科長、坪井俊教授、さらに事務職員の鴨下記代子さん・中川亜紀さん、前回の高木レクチャーの運営でもお世話になった沢内純子さんなどが協力してくださいました。また、日本数学会からは理事長の谷島賢二教授、事務局の長谷川暁子さんも来てくださって、その活動が支えられました。講演の様子は麻生和

彦助教・東正明さんらによる東大数理ビデオアーカイブスプロジェクトチームと丸山文綱さんの協力により撮影・記録され、ウェブ

http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~toshi/takagi_video/

で公開されています。

高木レクチャーのホームページ

http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~toshi/takagi_jp/

【高木レクチャー】「日本の現代数学の父」と呼ばれる高木貞治の名にちなみ、日本数学会が2006年3月に設置した。数学者の名前を冠した定期招待講演会は、日本初の試みであり、新たな数学の創造に寄与することを目的に、現代数学の最高峰の講演者を招いて年2回、春と秋に行われる。

【高木貞治】1875—1960。数学者。東京帝国大学卒業後、23歳でドイツに留学。ゲッティンゲンで世界の俊秀たちに出会い、大きな刺激をうける。帰国後26歳で東大助教授となり、4年後に東大教授就任。代数的整数論の研究で『高木類体論』（1920）を発表、ヒルベルトらの類体の概念を一般化した。「数学のノーベル賞」といわれるフィールズ賞の創設（1936）にあたり、第1回選考委員として世界5人の中の1人に選ばれている。